
神はここに居る

坂本 光太子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神はここに居る

【Nコード】

N1780T

【作者名】

坂本 光太子

【あらすじ】

あなたは神の存在を信じますか？

プロローグ

貴方は神を信じますか？

これは私が中学生の時に、見知らぬ男が私に言った言葉だ。呆気にとられる私を尻目に、男は私の為に祈りを捧げ、その場で涙を流して見せた。

「貴方に神のご加護がありますように」

男は最後にそう言い残し、私の前から姿を消した。そして次の日の朝、なんと私に神のご加護があつたのだ。大嫌いだった担任が死んだのだ。きっと神のご加護にちがいない。そうに決まってる。その日からだ。私が神という存在を信じるようになったのわ。

第一章 神の精神操作

1、女とホームレス

どしゃ降りの雨の中、歩道の端で女がポツンと立っていた。その女は雨宮といい、女はいつも決まってこの時間に目にする人物がいなのに、疑問を感じていた。自宅から徒歩十分のコンビニの、目の前にあるゴミ箱をあさるホームレス。雨宮はそれをいつも見物していた。別にそのホームレスが好きだからとかいうわけではないし、惨めだからというわけでもない。ただ、なんとなく気になったのだ。自分からはなにをするわけでもなく、向こうからもなにもされない。そんな関係を2ヶ月も繰り返していたのだ。

「あのホームレスはどこにいったの」

雨宮はホームレスの行方が、なぜだか無性に気になった。不思議だ、そう思い雨宮は首をかしげた。昨日は仕事で見ることができなかった、昨日何かあったのだろうか。雨宮は持っていた傘を傘入れにいれ、店内へと足を運んだ。

「いらつしやいませ」

店員の元氣な声が、雨宮を向かいいれる。正直、今日だけはそれが鬱陶しくも感じる。モヤモヤしながら雨宮は、真っ直ぐにレジに向かった。

「いつもあそこでゴミを漁っていた人は、今日どうしましたか？」

雨宮のいきなりの質問に、店員は呆氣にとられた。

「はい？」

「ですからゴミを漁っていた人ですよ」

店員は少し考えてから、ああという顔をした。

「あのホームレスの事ですね。あのホームレスなら、警察に捕まりましたよ」

「えっ」

雨宮は驚いた。

「少し言いにくいことなんですけど」

店員は雨宮に耳打ちをしようとした。雨宮もそれに乗る。

「一昨日、その路地裏で殺人事件があったのは知ってますか？」

「ああ、男性が殺されたやつですね」

「はい。なんでもその男性が殺された時に、金目の物が全部無くなつてたらしいんですよ」

「物取りですか？」

「みたいです。そしたらそのホームレスが怪しいってなつて。で、そのホームレスを調べたらなぜか被害者の血がついた金を懷に持ってたらしいんですよ」

「だから警察は犯人だと？」

「ええ、動機も物的証拠もあるでしょ」

「たしかに、揃ってますね」

雨宮は残念そうに下を向いた。

「あなた、お知り合いか何かですか？」

店員が怪訝そうに尋ねた。

「いえ、知り合いでもなんでもないです。ただ気になって」

雨宮は少し笑って、店員に軽く頭を下げた。

「あ、そうだ。お礼に肉まん買います。肉まん一つ下さい」

「あ、はい。ありがとうございます。少しお待ちください」

店員が愛想よく笑う。雨宮は購入した肉まんを口にしながら、そのまま家に帰っていった。

2、不可解な事件

久しぶりの休みの日を思う存分楽しもうとしていた菅原健太は、仕事の電話のせいで、ブルーな気持ちになっていた。

「もう解決してんだろ」

そんな文句ばかりいいながら、菅原は車を走らせている。

車を走らせてから十分、少し先に菅原の勤める警察署が見えてきた。菅原はブスツとした顔をキリツと変えて、車を駐車場に止めた。車から降りる時の菅原は、敏腕刑事に変わっている。誰からも尊敬される上司の彼は、一人の時とのギャップが激しい。

「菅原さんお待ちしました」

菅原が来るのを待っていたのは、長年連れ添った部下である山下恭平である。菅原のギャップの部分を知る１人でもある。

「今日はキリツとしてるんですね」

「どういういみだ？」菅原が怪訝そうに聞いた。

「いえ、せつかくの休みに呼び出されたので、機嫌が悪いとおもっていたので」

「悪いに決まってるんだろ」

菅原はブスツとした表情で山下の頭を叩いた。

「あ痛ー」

「なにがあ痛だ、こっちの心の方が痛いよ」

ブスツとした表情を整えた菅原は、署内へと入っていった。菅原の後ろをぶつぶついいながら、山下もついていく。

「失礼します」

署長室に入った菅原と山下を出迎えたのは、険悪な顔をした署長の大牟田だった。

「菅原くん、面倒なことになってきた」

大牟田の顔はどことなくひきつってもいる。

「新しく犯人が現れたとはいったいどういうことです？例のホームレスで犯人は決まりじゃなかったんですか？」

「そ、それがな」

大牟田の額に汗がにじんでいく。これほどまでに動揺している大牟田を見るのは、菅原は初めてだった。

「電話で話した通りだよ。一昨日から様々な人間が自分が犯人だと名乗り出てくるんだ」

大牟田は額の汗をハンカチで拭った。

「いったいどうして」

菅原は電話の内容を納得することができなかった。なぜなら、それはあまりにも不可解な内容だったからだ。

「そんなの知らんよ、私だって混乱してるんだ。本当にあのホームレスが犯人であっているんだろうね？」

「しかし、例のホームレスには、物的証拠があるんですよ」

菅原は持っていたファイルから一枚の写真を取り出した。

「この写真に写っている、血が付いてるお札が物的証拠ですよ」

写真を見た大牟田は、重々しく口を開いた。

「それがな、自分から犯人を名乗り出てきた奴ら全員が、血が付いたお札を持ってたんだよ」

「全員が？ そんなバカな。そんなこと・・・集団的な事件とかではないんですか？」

「私もその線だと思ったんだよ。だが自首してきた者の中には、被害者が殺された時に北海道に居たものもいたんだ。そんな遠くにいる人間にどうこう出きるわけがない」

「なら彼らがホームレスをかばって嘘をついているのではないですか？」

菅原の声がどことなく、荒くなっていく。

「しかしそんなことをしてなんの意味がある。それに血がついたお札はどう説明するんだ。・・・それに私には彼らが嘘をついているようには思えないんだ。実際にアリバイがない者もいる。彼らを見ていたらアリバイの方が間違いではないのかと思ってしまうよ」

菅原は次に言う言葉が思い浮かばなかった。しかし北海道にいた人間が福岡にいる人間を殺せる訳がないのだ。事件の不可解さに菅原は頭を抱えた。

「・・・たしかに、そうなってくると例のホームレスも」

菅原は重々しく口を開いた。

「そうだ。犯人とは言い切れんのだ。誤認逮捕となると、面倒なこ

とになる。下手すりや首が飛ぶぞ」

「そ、そんな」

菅原は失神しそうな程、気が動転していた。

「と、とにかく、自首してきた人達に合わせてください。私には状況がうまく呑み込めない」

菅原は必死だった。自分が捕まえた犯人が誤認逮捕の可能性があるとは。しかも犯人逮捕から一週間が経っており、すでにメディアで全国的に犯人逮捕の報道をしてしまったのだ。

「くそ、何でこんなことに」

今まで誤認逮捕などしたことなかった菅原は、初めての失敗で動揺を隠せずにいた。そして山下もまた、上司の動揺する姿を見て、さらに自分までもが責任をおう可能性に気付き、動揺を隠せないでいた。彼らの心中は、事件の謎と首がかかった状態の恐怖とが入り交じり、混沌とした闇渦状態と化していた。

3、異常な集団

菅原は自首してきた自称『殺人犯』達が集まっている部屋に向かった。大牟田の話ではなぜか、彼らは自首してきてから全く家に帰ろうとしないらしい。それどころか、警察署すら出ようとしないうだ。菅原はその異常な自称『殺人犯』達に、少なからずとも恐怖を感じていた。まるで、ホラー映画を見ているかのように、胸の鼓動が激しくなっていく。殺されるのではないか？そんなイヤな考えが頭をよぎる。

心配することはない。そう自分に言い聞かせ、菅原は部屋のドアを開けた。

部屋に入ってきた菅原達を向かい入れたのは、奇妙な雰囲気を感じ出した人間達の、異常な視線だった。

「菅原さん」

どうやら山下も、その視線の異常さを感じとっているようだ。

「大丈夫だ、心配するな」

「でも、皆やつぱりおかしいですよ」

菅原達の緊張はピークに達していた。その異常な目は二人に恐怖を植え付けた。菅原は息を飲んだ。長く刑事として色んな人間を見てきたが、これ程までに恐怖を感じたことはない。二人が部屋に入ってから少しして、一人の女が口を開いた。

「わたしがころしたんです」

何ともか細い声だった。上品な面持ちのその女は、顔からはとてもにつかわぬ言葉を言った。

「はい？もう一度よろしいですか？」

しかし菅原には、そのか細い声は届いていなかった。仕方なく、聞き返す。とたん、先ほどのか細い声が嘘のように、喉が張り裂けんばかりの大声を女は出した。

「だから私が殺したんです。あの男を。私が殺したんだ」

すでに女の顔からは、上品さの欠片も感じとることはできなかった。その女の言葉を合図にするかのように、他の者もみな、喉が張り裂けんばかりの大声を出し始めた。部屋中が大声に包まれる。

「私が殺したんだ」

「私が殺したんだ」

「私が殺したんだ」

みな口にする言葉はどれも同じだった。私が殺した、その一点張り。この中の誰が正直者で、誰が嘘つきかわからないが、その顔と行動はみな狂気に満ちており、恐怖そのものでしかなかった。

「菅原さん、菅原さん、なにしてるんですか」

あまりの恐怖で動けない菅原の肩を、山下の震える手が揺すった。

「菅原さん、とりあえずここを離れましょう。気が狂いそうです」

我に帰る菅原。山下の声は震えている。

「お、おお、一回離れよう」

二人は逃げるように、その場から離れた。二人が離れた後もそれは続き、何人もの警官が止めに入り、なんとか沈静したのだった。

4、ベッドの上にて

ベッドの上で横になった菅原は、昼間の事を思い返していた。今年で42になり刑事歴20年のベテラン刑事であるが、今まであんな目を見たことがない。だいたいの殺人犯は狂気の目をしている。しかし、あの部屋にいた人間の目は全くの異質だ。まるで魂がそこにはないかのごとく目が生きておらず、まるでなにかに取り憑かれたように、もしくは操られたように行動する異様な存在。・・・しかし、そんなことがありえるのだろうか。そんなもの幽霊や神様等のオカルトなネタ話にすぎない。本当にそんなことがありえるなら、私たち警察は意味ないではないか。菅原は自分がありえもしないネガティブな考えをしているのに、戸惑いを隠せなかった。

「どうしたらいいんだ」

菅原はほとほと困っていた。このままの状態でいけば、菅原は誤認逮捕でクビかもしれないのだ。クビがなかったとしても、マスコミは黙っていないだろう。ここまで不可解な事件、そうとう面白おかしく扱うはずだ。菅原の優秀なイメージが崩れることは、ほぼ決まっていた。先の人生を考え、菅原は深いため息をついた。気分転換でテレビをつけ眺めていたが、菅原の頭に内容が入ってくることはなかった。

菅原がベッドで横になってから、既に三時間が経っていた。菅原は二時間程前から眠っており、部屋の電気はつけっぱなしだ。静かな夜、響く寝息が何ともうるさかった。それから五分後、突然部屋の電気が消えた。菅原の部屋で蠢くなにかは、そとあるものに手を伸ばした。それをすばやく懐にしまい、ゆっくりと部屋から出ていった。暗くなった部屋に、菅原の寝息だけが響いた。

5、あの時の女

次の日、菅原と山下はもう一度、自首してきた者達に会うことにした。いつくも早く事件を解決するため、彼らの情報を少しでも手にいれなければならないのだ。二人は会議室で、彼らが来るのを待っていた。

「菅原さん、大丈夫ですかね？」

山下は昨日のような事態になることを、かなり恐れていた。

「大丈夫だ、今日はみなをいっぺんに相手にはしない。一人だけ別室に呼んでいる」

「なるほど、なら大丈夫ですね」

山下は少し不安がとれたのか、先ほどまでの緊迫した顔が少し緩んだ。

「山下、気を緩めるな。きちんと引き締めていけ」
「す、すいません」

しばらくして、目の前に一人の女性が現れた。横には彼女を連れてきた警官が立っていた。

「こちら、川上優子さんです」

そこにいたのは昨日、一番最初に大声を出した女だった。

「どうも、私は菅原というものです。こちらは部下の山下です」

二人は頭を軽く下げた。しかし自己紹介をする二人に対し、女はなんの反応もしなかった。

「川上さん、聞いてますか？」

菅原が怪訝そうに聞いた。

「ずっとこんな状態ですよ」

横にいた警官がため息混じりで口を開いた。

「彼女達がいた部屋からこの会議室まで、一言もしゃべらないんですよ。彼女にここに来る了承をとったときも、首をたてに降るだけでした。まるで感情がないかのごとく、ずっと無表情なんです」

「そう言えば署長も同じような事をいつてませんでした？事件のこ
としかしゃべらないって」

山下が思い出すように口を開いた。

「そうか。なら、川上さん。事件の話をしましょう」

とたん、川上はさっきまでの態度が嘘のように、菅原の方を向いた。
「あなたは岡本裕一を自分が殺したと言ったそうですね。しかし、あなたはその事件の日、北海道にいた。あなたには岡本裕一を殺すことは出来ないはずなんです」

「・・・わたしが」

菅原の質問に川上が口を開く。これには横にいた警官と山下も、驚きを隠せなかった。菅原も内心驚いている。

「私が殺したんです。私が岡本裕一を殺した」

菅原はため息をついた。

「それは昨日、お聞きしました。ですから、あなたにはそれをする
ことは無理なんです」

「お札です。お札が証拠です。あの血が付いたお札が証拠です」

川上はこの事件の一番の謎を言った。

「そこなんです。北海道にいたはずの貴方が、なぜこの血が付いた
お札を持っているのが知りたいんです」

「だから、岡本裕一を殺した時に盗ったんです」

川上の口調が、少し激しくなった。

「私はあの男を殺した。そしてお金を盗ったんです」

川上のらちのあかない返答に菅原は声をあげて言った。

「いいですか、調査の結果、あなたは事件の次の日に北海道から福
岡に帰ってきているんです。空港の監視カメラにも貴方が写ってい
る。だから貴方が犯人なんてありえないんです」

「それは私じゃない。私があの男を殺したんだ。私が、私が」

菅原はあまりのらちのあかなさに、深くため息をついた。その姿を
見ていた山下は口を開いた。

「一度、休憩しませんか？」

山下はそう菅原に提案した。菅原もそれを了承する。

「では、一度休憩をしましょう。席を外しても大丈夫ですよ」

しかし川上はまったく動こうとはしなかった。

またしてもため息をつく菅原。そんな重苦しい場の空気が嫌で、山下は一足先にトイレに向かった。

6、惨劇の中の使者

トイレから出てきた山下は、廊下の窓をあけ外を眺めた。

「いったいどうなってんだよ」

事件が解決する目星が

まったく見えないのに、山下は嫌気がさしていた。タバコに火をつけ、心を休める準備をした。山下にとってタバコは一時の楽しみである。タバコを吸い始めて、二分が過ぎたときだった。

「きやああああ」

女の悲鳴と、銃声のような音が署内に響いた。場所は菅原達がいる辺りからだった。

「な、なんだ？」

山下は急いで先ほどの部屋に向かった。

「菅原さん、なにがあったんですか」

部屋の扉を開けた山下は、室内の惨劇に目を疑った。

「な、なんだよこれ」

そこには無惨に横たわる、警官と川上の亡骸があった。

「どうなってんだ」

頭には弾痕があり、どうやら銃殺のようだ。

「す、菅原さんは？菅原さんはどこにいったんだ？」

とたん、またしても悲鳴が署内に響いた。

「いったい、なにが起きてんだよ」

山下は急いで悲鳴のする方に向かった。どうやら悲鳴は、殺人犯たちが集まっている部屋から聞こえてくるようだった。

「た、助けてくれ」

部屋についた山下の視線にうつったのは、ドアの前で倒れた、血だらけの男だった。

「大丈夫か？ いったいなにが起きてる？」

山下は男の肩を掴み聞いた。

「い、いきなり男が現れて銃を」

男はそう言い残し、その場で力つきた。

「くそっ」

山下はあわてて、ドアを開けた。瞬間、山下は目を疑った。そこには、彼らに向け、銃を乱射する菅原の姿があった。

「な、なにしてんだよ。菅原さん」

山下はあまりの衝撃で、頭を整理することができなかった。だが、手は自然とピストルを掴み、菅原に銃口を向けた。

「菅原さん、やめてください」

山下は大声を出した。しかし菅原はやめようとしなない。

「やめる菅原。撃つぞ」

山下はさらに強く雄叫びを上げた。すると菅原は撃つのをやめ、山下に顔を向けた。その目は正気を失っている。

「なんで、なんでこんなこと」

「・・・は、はは」

突然、菅原が笑い出した。足元には無惨に死体が転がっている。この部屋にいたものは、みな死んでしまったようだ。

「山下、私は気づいたんだ」

「え？」

「神様だよ。神様がこの世に存在するってことにだよ」

菅原のあまりの変貌ぶりに、山下は声を失った。

「今回の事件、なにも不可解なことなんてなかった。全て神様がなさったことなんだ」

「なにいつてるんです。神様なんて想像のものにすぎない」

「ちがう。神様はちゃんと存在するのさ」

「だからってなんで彼らを」

「神様の御命令さ。わたしには彼らを殺せって聞こえた」

菅原は両手を上げた。

「神様、私はやりましたよ。使命を果たしたんだ」

山下はあまりのできごとに頭が混乱している。

「山下、私は自分の使命を全うした」

そついうと、菅原は自分の頭に銃口を向けた。

「す、菅原さん、バカなまねはやめてください」

「じゃあな山下」

「やめろー」

「神様バンザイ」

部屋中に銃声が鳴り響いた。

7、事件後

とある病院の待合室で、一人の男が椅子に腰かけていた。男の名は山下恭平といい、ある事件のトラウマでこの病院に通っている。男は死んだような目でテレビを見つめていた。テレビでは1ヶ月前に起きた、とある事件の事を放送していた。世間はその事件を『刑事大量殺人事件』と名付け、犯人である刑事の事を『神の狂信者』と呼んだ。男は看護婦に呼ばれ、診察室に向かった。男を呼んだ看護婦の胸に「雨宮」の名札が付いていることは、彼にとってどうでもいいことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1780t/>

神はここに居る

2011年10月9日00時57分発行